

山

間

文書の写真を、三、四枚撮って、筆写を少しした。終えて傍を見ると、写真を撮る時まで元氣よく話をしていた主人は退屈したと見えて、肘枕で畳の上に眠ってしまった。私は下駄を突っかけて庭へ下りた。泉水があつて小さな滝が落ちている。昨夜、真っ暗になつてからここに着いて、先ず体をお拭きなさいと言われて、この滝で顔を洗った。主人の命令で、若い息子が自転車の電灯を外して提げ、崖の上へ駆け上がって行つた。しばらくすると、滝へ水が素晴らしい勢いで流れて来た。この時は暗くて判らなかつたので、崖の上はどんな山になつているのかと思つたが、顔を洗いながら、どうも山の水にしては生ぬるい、何だか少し臭いような気がした。今朝起きて見ると、崖の上には稲田が続いている。昨夜の豊富な水はどうもこの田圃の水らしい。

私は泉水の傍から登って、崖の上へでた。二タ畝程の田圃の向方は桑畑で、そこから山の麓の雑木林に続いている、雑木林の前を左へ行くと、朽ちかけた木の鳥居がある。小径が山へ登つている。私は鳥居の傍にある木の切り株に腰を下した。谷川沿いの部落が下の方に見渡せる。部落と言つても家数は六軒か七軒で、街道を外れて入り込んだ山間だから、郵便の集配にも来ない様な淋しいところである。郵便は、部落の有志が、近くの部落の集配所に取りに行くのだそうだ。午後の陽は少し傾きかけたが、空は明るく気持ちよく晴れている。赤蜻蛉が翅をキラキラさせながら、沢山飛んでいる。傍の南瓜畑には、大きな熊蜂がブンブン言っている。鳥居の下の陽当りにも、蜜蜂や小さい美しい薄青色の蜂が盛んにやって来る。その中に混じつて、時々例の一寸五分位の赤黄色い、恐ろしく胴の肥つて長い蜂がやってくる。人馴っこく五月蠅く近くへやってくる。この虫は一体蜂なのだろうか。今朝私は便所へ入つたところが、主人が大いに気を配ってくれたものと見えて、便所

の底には灰が綺麗にまいてあった。硝子の窓がキッチンと閉まっていた、朝陽が当たって蒸れていたの、私は窓を開け放って用を足した。その時、窓先の桑の木に、この黄色い蜂が二、三匹とまっていた。お昼頃になって、私は再び便所に行った。何気なく跨いで底を覗いて、おや蜂が、と思った瞬間、糞の上にたかっていた十匹ばかりが、ワンと舞い上がって、私の股倉の中へまるで下から豆でも投げ上げたようにぶつつかった。私は肝をつぶして、浴衣の裾が違った様に振りながら便所を飛び出した。窓が開いていたので、蜂はすぐ出て行ってしまった。幸い刺されはしなかったが、この時はじめて窓を閉じておくわけが判った。股倉が変に汚れたようで気持ちが悪かった。しかしどうにも仕様がなくて、我慢してしまった。その黄色い蜂が、ここでもブンブン付きまとう。人の臭いが余程好きらしいから、蜂と言うよりは、蠅の部類だろう。今朝の事を考えると、汚らしくて堪らない。

私は立上って歩き出した。主人の家の厩の傍を通って、やや険しい狭い道を下りて行く。道は水の綺麗な小さい谷川に沿って下って行く。道の傍には、所々に刈り取った稲をかけるのと同じように、横木に粟が塀のように吊り下げてある。粟を揃えている向こう側から農夫が顔を出して、私に挨拶した。昨夜主人の家に集まってくれた人々の一人だ。彼は判り難い土地言葉で、稲も作ってあるけれども、稲の前に粟を片付けてしまわないと困るから、と言う。この辺りは粟が主食だと、今日主人も話していた。昔は、この先の大迫町おおはさまを中心にして煙草の南部葉の産地で、暮らしは割合楽だったが、最近では米国葉が盛んになって具合が悪くなって来た。米国葉には是非とも乾燥所が必要であるが、この小さな倉ぐらの乾燥所の建築費用が、土地の貧乏な従来の煙草作りの人にはなかなか出来なくて、結

局、煙草作りを諦めざるを得ない者が大分出たのだ。粟を主食にするようになったのは、それからであると言うことだ。粟の穂はこまごました粒が沢山豊かについているが、私には何だか、これが食い物であるとは思われないような気がした。子供の頃これと似た穂の出る雑草があつて、その先を少し残してしごいだ穂でよく蛙を釣った。蛙に食わせる穂との連想が悪いのかも知れない。

三、四軒の農家の横を過ぎると、やや山の開いた田圃のある中へ出た。田圃の間と言っても、路は谷川と共に上がったたり下がったりしているので、実は昨夜ここを通った時は、どんな山の傍を通っているのかと思つたのだ。ブラブラ行く私の後から、十三、四の二人の女の子がやってきて、追い越して行つた。二人とも、風呂敷を背中に背負つて、両手にも一つずつ下げていた。着物は縞目も判らない様に汚い。髪も汚らしく丸め束ねて、足にはゴム靴をはいていた。風呂敷には草が一杯つまっていた。しばらくすると、道の曲つた所で二人に追い付いた。一人は立つて背負つた紐を直している。一人は腰掛けて休んでいる。私は風呂敷を覗いて草をいじつて見ながら、

「これを、どうするの？」

と訊いてみた。二人共黙っている。まるで私の言うことが聴こえないかのように、無言のまま頻りに背中を直したり、帯を結んだりしている。

「え？どうするの？兎にでもやるの？それとも、この草、食べられるのかしら……」

少女達が黙つたままなので、私の言葉は段々独り言になつて行つた。腰掛けていた一人がツイと立上つた。そして置いてある風呂敷を上げた時、その頑な表情の中に、不意に眼が動いて、チラと私の足元の方を見た。その視線をどう解釈する隙もなく、連れを促し

て、まるで駆けるように急いで行ってしまった。一町ばかり行くと、その少女は別れて、右の川の橋を越えて、そこにある農家へ駆け込んで行った。私は幽かに味気無さを覚えながら、ブラブラ歩いて行った。すぐ右手の低い山の中程に、此方と平行した道があつて、一町も隔たっているだろうか。そこを歩いている三人の子供の顔がよく見える。見るとはなしに、その方を見ていると、三人は時々立止まって私の方を見ているようだ。十二、三、赤子を背負った女の子が先頭で、九つ位の学帽を被った男の子、それからまた十二、三ぐらいの女の子だ。私がじつと眺めると、先頭の女の子は吃驚したように駆け出した。後の女の子も、男の子の背中を押す様に急がせて、此方を振り返り振り返り駆け出して、たちまち三人共木立の中へ走り込んでしまった。私は何故私を見て逃げたのだろうと思ひながら、ぼんやり立っていた。手前の農家の粟を吊るしたところに、物の動く気配がするので、其方へ顔を向けると、道で逢ったさっきの少女が、此方を覗いていた顔を慌てて引っ込めるところだった。私はまたぼんやりと、今度は粟の吊るしてあるのを見つめた。気のせいか、向方の木立の方でも女の子がしきりに覗いている様な気持ちがする。さっきの二人のもう一人の方も行きかけたその辺で、稲の蔭から此方を覗いているかも知れない。しばらくして、私は前にある谷川の小さい澱みの、おびただしい靱殻の流れ寄っている所へ眼を移して、我に還った様に苦笑した。

道はしばらく行ってからやや登り勾配になつて、左の山の裾の杉林の中へはいって行く。中程で二股になつて、左の方は林を抜けて山腹をつたつて登り、右の方は川の岸へ下つて、土橋を越えると向こう岸の灌木の繁みに沿つて、左へ曲がつて消えている。此方の暗い木立から明るい土橋と向こう岸の緑の繁みを望んだところは、まるで絵のようだ。私は道を

下って橋の方へ行きかけたが、ふと、この舞台の様に明るく浮き出ている橋の上へ、何か適当な人物を立たせてみたいと言う気がした。しかし、すぐまた「平凡な」という蔑みの気持が浮かんで出て、頭を振って歩き出した。

ところが二、三歩行くか行かない内に、思いもかけず、それこそまるで奇跡か何かの様に、私の今胸に浮かんだ考えが直ぐさま天に通じたかのように、一人の老婆が灌木の陰から忽然として現れた。老婆は、浅黄の着物に黒いモンペを付けて、草履を履いている。頭には手拭いを被って、腰には小さい竹籠をつけて、長い柄の鎌を杖にしながら、ボツボツとやって来る。私は心の中で喝采した。来た来た。この景色の中にこの老婆だ。昔嘶がやって来た。老婆は橋の上で、こっちにいる私の姿を認めたと見えて、一寸立ち止まるとニコニコと笑った。手拭いの下からのぞく髪の毛は真白い。私も思わず嬉しくなつて、ニコニコした。橋を渡ると、老婆は終始機嫌よくニコニコしながら近付いて来た。二、三間手前まで来て何か言った。一寸聞き取れない。その籠の中に、川下で何か素晴らしいものでも拾って来たと言うのか。老婆は直ぐ近くまで来た。鎌の柄の先に両手を重ねて、一休みして吐息をついた。そして私の方に振り向いて、

「これだき、のム、のぼるにも、ハア、てアへんだにねす」

僕は驚いて老婆の顔を見た。老婆は、苦しがつて、肩で息をしている。

「どうしたべか。ム、ウ、ウ。いだアくて、イダクテ」

老婆は左の手をさすった。袖口から出ている両手の手首は、大分腫れている。足も赤子の足の様だ。そう思って顔を見直すと、顔色が非常に悪い。皮膚がむくんで、妙に蒼く光っている。皺は濃く深い。眼は蒼白い瞳が動かない。ただ、頬が思い出したように激しく

引きつるので、その度に眼が笑う様に細くなる。さっきニコニコ笑ったと思ったのはこの痙攣だったのだ。……鼻はむくんだ皮膚の上に気味悪い横皺が寄っている。唇から顎にかけて絶えず細かに震えていて、落ち残った下顎の歯が一本、頭を唇の間からはみ出して、之もブルブルしている。何処か体の奥の方に猛烈に痛む処があるに違いない。昔嘶どころではない。私の胸の中の喝采は無残な竹筥返ししゅべがえを食った。

「……しも……ありユ……ンだべか……ス？」

老婆は幽かに私の顔を覗き込んだ様だ。言葉も判らないが、動かない眼の表情も読み取れない。私は、思わず大きな声で訊ねた。

「お婆アさんは、何処か悪いのですか」

老婆は、私の言う事などには頓着せずに、何かしきりに言っている。僕は再び大声で繰り返した。

「何処か、体でも悪いのですか」

「ン……ありよ……おめえさまも……ン……手紙もよこさず……ねツす」

何の事だか判らない。親不孝の息子でもあつて、何処かへ行ったまま、消息が無いとでも言うのだろうか。

「ム、ウウ、どうしただべか。……いだくて、いだくて……この年寄り婆ア……死んだらば、なもかも、なおるべ……なかなか……死ぬ……くね……ねど……ハア、おめえさま」

老婆は、肩で息をしながら、一生懸命に訴える。顔は依然として、時々、遠くから見れば笑っているかと思われる格好に歪みながら、その奇怪な頬の痙攣の中に、苦痛に虐さいなまれて人の世を遥かに離れた、ゾツとするような凄惨な表情をたたえる。

「……耳も……ンね……に、……この頃は、ハア、眼も……」

こう言つて、老婆は強く眼をつむつた。よごれた眼尻から涙がながれた。耳が聴こえないなら、私が大声で訊ねたのも構わず、独りで饒舌しゃべったわけだ。目も悪いと言うならば、さつき橋の上で私の方を向いて立止まったのは何だったのだろう。二、三間手前へ来て、始めて私の姿を認めたのだろうか。今だって、この私をどう言う姿の人間と思つて話しているのだろうか。

私は、もう黙つて老婆を見つめるより外はなかった。老婆は吐息をついて、物を言うのを止めた。訴えがすんだのだろう。老婆は鎌を持ち直して、杖につきながら歩き出した。左手の山腹の道をソロソロ登つて行く。大分かかつて、やっと半町程登ると、突然まるで機械の様に体の向きを変えて、左の山の上の方へはいつていった。その姿が見えなくなるまで見送つてから、私は踵を返した。私は少し暗い気持ちになつて、もうブラブラする気がしなかった。日も陰つて来た。

主人の家に戻つて縁側へ上ると、主人はそれまで眠っていたものと見えて、足音を聴いて驚いて起き上がった。そして台所から枝豆のゆでたのを持って来て、縁側でお茶を入れた。彼は、眼を呆んやり見開いたまま、まだ半分醒め切れないような顔付だった。私も余り口をききたくなかったので、黙つて夕暮近くなつて来た庭を眺めながら、お茶を呑んだ。

『山間』は長谷川千秋の名前で発表している